特別講演

日本の自然と文化と生活の和

静岡文化芸術大学学長
川勝平太さん

日本における「川」の持つ意味

高度成長期の日本で「川」というものを考えたとき、工業用水、農業用水としか考えられていない、どうしても経済的観点が優先されていました。そして今、川が持つ、そして上流が持っている、もっと精神的なもの、文化的なものの意味を、改めて考えていかなくちゃならないということが叫ばれ始めたんです。

世界遺産は、1992年の時点で既に20年経っていますが、文化遺産の登録は、大半がヨーロッパだったんですね。それでは、文化というものは、他の国にはないのか、ということなんですよ。

山は何を生みますか。緑ですね。緑は何を生むかというと、水を生むということですね。水はどのような形で存在しているのかといえば川ですね。

大井川ですよ。大井川を世界文化遺産にすればどうかということなんです。距離160キロメートルですよ。短いと思いますか。安部川は51キロですよ。それと比べると長いですよね。日本で一番長い信濃川でも300キロ台ですよ。

たいした長さですよ、160キロというのは。

大井川。これは単なる川でしょうか。

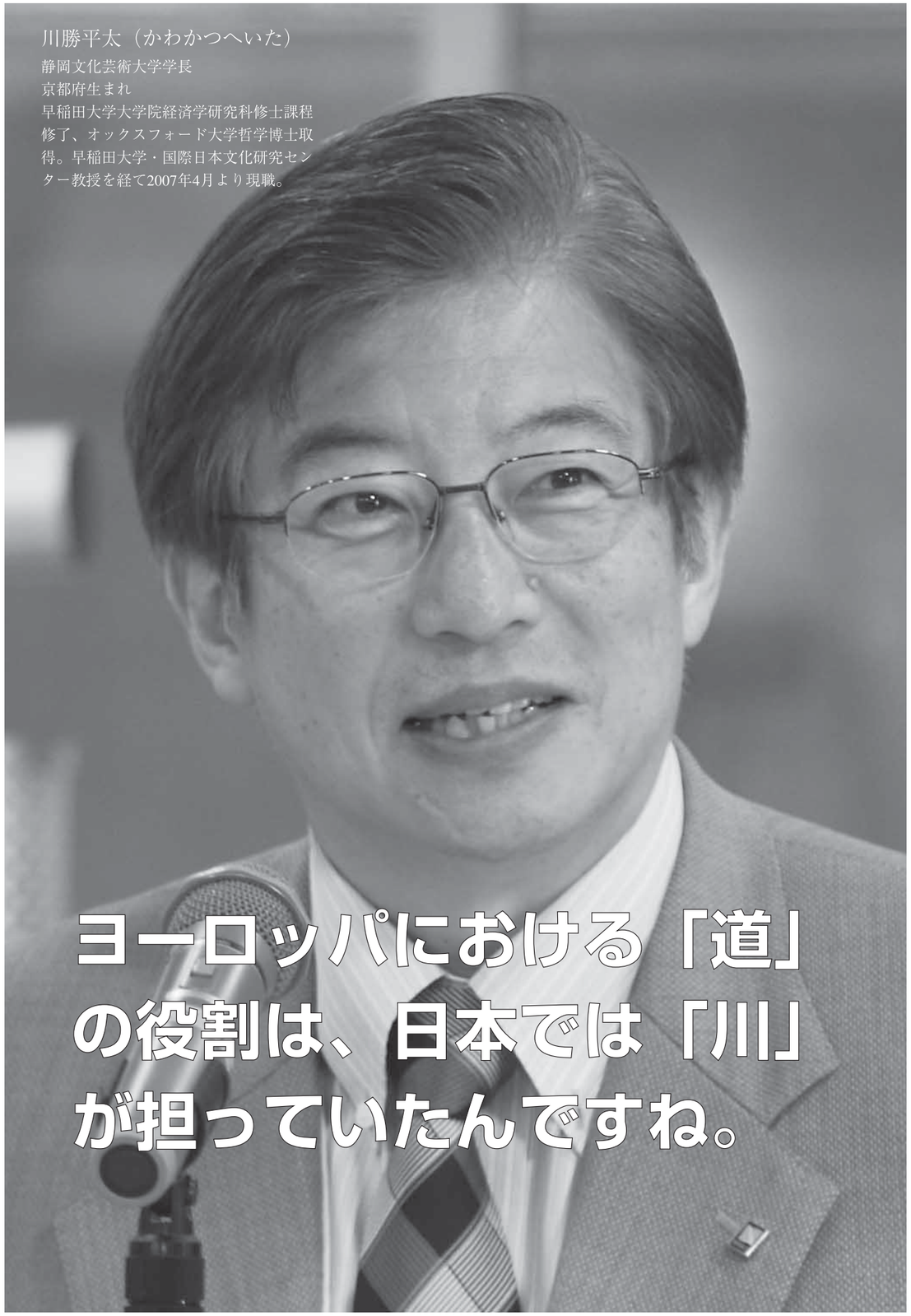
今日、私は町長さんと一緒に長島ダムに行ってきました。水没した集落というのがあって、失ったものを忘れないように、そこを公園として残してありましたよ。これは人が手を加えています。手を加えないと水害が起こる。あるいはまた人命が失われる。また、大井川にはかつて帆かけ舟があがってきていたという。今はもう、あちこちにダムができて水がない。水がない川では、なんとも悲しいと。

その一方で、その水は8市5町の人たちの命の水となっている。そういう川なんです。人為的にしたものですから、これは文化的な行為が入っている。そして景観もきれいであると。これが文化的景観でなくて何なのかということなんです。

そして、川が文化遺産になっているところはどこの国にもありませんよ。しかも大井川は静岡県1県において完結している川なんですね。だから、まとまりやすいと。下流の人が上流の意味について知るには「流域全体としての川」なんだと認識しなければなりません。

そのためには、なる、ならん、は別として、世界文化遺産になりうる素材だと言えるんですね。

海外の文化遺産の真似ではない素材は何かと探せば、日本では「川」というものに辿り着くんです。

ヨーロッパの「道」は日本の「川」

ヨーロッパの平らなところと違って、日本には峠があります。険しい山道を馬車で物を運ぶことはできません。それならどうするか。川がありますよ。山の物を海に運ぶには、いかだを組んで流せばいいんです。そして、海の幸を舟で上流に運べば